

海の夢



秋山達子

地中海の海の色は濃紺とエメラルド色で、美しい宝石のように輝いている。しかし、冬の北海海岸に立つと、これも同じ海かと思われるほど、灰色で、暗くかすんでいる。海はその土地の雰囲気をそのまま映しだし、毎日の空模様を通り、いろいろと感じを変える。だから、一口に海といってもさまざまで、その人の育った環境や、性格や、そして、その日の気分によって、心に思い描くイメージは同じものではない。

海は毎日のどこからともなくあらわれてくるその日の気分を誘いだすと同時に、はるか昔の、こども時代の思い出や、さらに昔の人類の古い古い記憶まで呼びさますような気がする。日本の海は公害で、すっかり荒れてしまったけれど、浜辺の砂の上をはだして歩くと、さくり、さくりと不思議な湿った砂の感触が伝わ

て、ふり返ってみると、ところどころ波で洗われて消えてしまった足跡が、断続的に見え隠れしている。人の記憶もまた、同じようなものではないだろうか。

ずっと前に、夢のセミナーをした時、知らない間に皆の話が海の主題に集まってしまった。無意識的な世界に近づくと、最初の水があらわれるとユング心理学ではいう。だから、自分の無意識の世界をのぞいてみよう、意識して夢の世界に近づくと、海の光景を見ることが多い。はるか向こうの離れ小島まで泳いでいったら、美しい青花が一面に咲いていたという、海上の楽園のような夢を見た人があった。この夢などは、むかしむかし、海の方うにあったという蓬萊の島の話の思い出させる。マルコ・ポーロは、中国まで来て、さらに東の海上にあるという黄金の国、日本

島に憧れたという。

反対に、海の恐ろしいイメージでは、ヒステリー発作で失神する寸前に、高波に引きこまれて、海の深みに連れ去られるというような夢を見た人がある。高波や洪水の夢は、いつもヒステリーの発作と関係があるわけではないが、心の奥から、わけのわからない激情が襲ってくるような時に見ることが多く、いろいろな感情が騒ぎたてて、不安な感じのする思春期に見ることが多いといわれる。

普通の時によく見る海の夢は、たとえば、海と陸地の間を歩いていると、ひたひたと足の甲に水しぶぎがかかるような光景で、これは光景という視覚的なものより、足にふれるやさしい、柔らかな水の感触にかかわる気分を思い出させることが多い。

海の中には竜宮があつて、乙姫様がいたり、宝物が隠されたりしている民話や、お伽話が沢山あるが、海の底にはなにか非常に大事なものが潜んでいるような気がする。仏教の『大乘理趣六波羅蜜多經』というお経には、昔、ある商人の息子が、父母の貧苦をみかねて、竜王に守られて海中にあるという如意珠をとりに行く話がある。如意珠は、真陀摩尼とも呼ばれるが、これはサンズクリットのチンターマニという言葉を音訳したもので、この話は、もともと古いインドの民話が伝わったものようである。

同じような話は、シリア伝承のグノーシス的なキリスト教の聖典にもみられる。キリストの双子の兄弟といわれるトマスの『トマス行伝』の中に「真珠の歌」とよばれる一節があつて、そこでは東洋の一王子が蛇に守られている真珠を求めて旅にでかけ、さまざまな試練を経て無事帰国するまでの物語である。どちらの話も、おそらく同じ起源のものが伝播したのかもしれない。しかし、どちらも仏教やキリスト教のような宗教の中にとり入れられて、東洋と西洋に知られたのは、海の与えるイメージが、世界的に誰の心にも、なにか神秘で、得難い宝を秘めているような印象を与えるからであろう。

海は美しい、そして恐ろしい。海辺の岩の上で、じっと波のうねりを見ていると、いつの間にか、海の底に引きこまれていくような気がする。海の魔力に魅かれて、犠牲になった人も多い。海浜の丘の上に、ふと見かける小さな社は、海難を避けるための漁夫たちの守り神であろう。マルセイユにあるノートルダム・ド・ラ・ギャルド寺院は、海難にあつて無事助かつた水夫たちが、小さな舟を献納するという。やはり海は、ノートルダムといわれるように、我らの聖母であつて、すべてのものが永遠に回帰する永遠の母の面影を伝えるものかもしれない。多くの若い男たちが海に憧れるのも、そのためかもしれない。

(大正大学)